〈運命〉との戦い

――文壇登場前夜の谷崎潤一郎

明里千章

谷崎潤一郎は第二次「新思潮」創刊号（明43・9）に「史劇　誕生」を発表し、文壇に第一歩を踏み出した。続いて「象」「刺青」を発表したが殆ど注目されなかった。書評等で注目されはじめたのは「スバル」掲載の「少年」（明44・6）からである。そして、永井荷風の評論「谷崎潤一郎氏の作品」（「三田文学」明44・11）によって新人作家として脚光を浴びることになるのはよく知られている。谷崎は「三田文学」に「颱風」（明44・10）を書いたが、青年の性慾を赤裸々に告白した小説だったために、同誌は発禁処分を受けた。この発禁小説は期せずして二つの幸運をもたらした。この小説を読んで面白いと思った滝田樗陰は文壇の檜舞台「中央公論」に紙面を提供し、翌十一月「秘密」が掲載される。荷風の評論も同時に出る。そして同年十二月、最初の作品集である胡蝶本『刺青』が籾山書店から上梓され、谷崎はまさに名実ともに新人作家としての地位と名声を獲得した。不運が幸運を招いたのである。[1]

しかし、この華々しさとは裏腹に、学生時代、文学を志した谷崎は神経衰弱に陥ったこともある。谷崎の学生時代の習作・初期文章を読んでいて気付いたのは、〈運命〉という言葉が頻出していることであった。少年谷崎が言う我が拙い〈運命〉が、処女作「誕生」に於ける歴史の偶然を必然にする〈御運の強さ〉へと

変転していく道筋をたどりつつ、谷崎が言う〈運命〉の意味を考察するのが本稿のモチーフである。

勝本清一郎「「狆の葬式」と「うろおぼえ」に就いて」（「文学」昭37・9）、小瀧瓔子「作家以前の谷崎潤一郎」（「立教大学日本文学」昭45・7）、遠藤祐「構成家・谷崎潤一郎の〈誕生〉―その作家的出発の一面について―」（「フェリス女学院大学紀要11」昭51・4）、佐々木寛「「刺青」読みかへの試み」（「文芸と批評」昭56・11）などの先行研究から多くを学んだが、特に啓発されたものに中島国彦「作家の誕生―荷風との邂逅」（「国文学」昭53・8）、箕輪武雄「「史劇観」論争と初期潤一郎―文学的始発期をめぐる一考察―」（紅野敏郎編著『論考谷崎潤一郎』昭55・5）がある。谷崎の〈混沌〉と〈関係性の希求〉を視座にして、谷崎による〈「刺青」処女作神話の形成〉を解き明かした中島氏の論考は画期的であった。また、箕輪氏は従来等閑に付されていた谷崎の史劇観形成とその実践を検証し、谷崎の〈理想美〉を追究した。また、史劇に見える〈運命〉の語が「新思潮」同人たちが一高時代から〈共有する感傷性〉に遡れるとする見方は、筆者も同感である。

これらを踏まえながら、〈運命〉という語の変転を考察し、拙い〈運命〉を嘆き続けた文壇登場前夜の谷崎潤一郎の文学的戦いを辿ってみたい。

一

谷崎は〈いよ〳〵文筆で立たうと思ひ定めたのは、一高を出て大学へ入つた時である〉（「『少年世界』への論文」大6・5）と言う。明治四十一年九月、第一高等学校英法科から、東京帝国大学国文科に入学した。その直前のものと思われる弟谷崎精二に宛てた書簡で、

予は去年の夏より非常なる煩悶と苦痛と不平との渦中に在り、予も断然政治をすてゝ文学に志すべし。（中略）われら須く真率に、真摯に、真面目に宇宙と人生とに対せざるべからず吾人はまづ醒むるを要す。今後の小説家は宇宙人生の美を讃唱するよりもその苦に呻吟すべし。うたふ小説を作らずしてうなる小説をかけ、これ吾人の希望にして覚悟なり（傍点原文）

と述べている。ときに谷崎数えで二十三歳である。ここには人生の苦に呻吟する小説家を目指している青年がいる。またつづけて、〈予は白鳥と独歩を好む〉として「何処へ」「牛肉と馬鈴薯」他の著作を挙げ、〈自然主義が貢献したる顕著の産物なるべし〉と、自然主義文学に対して一定の評価を下しているところは興味深い。同書簡に見える〈宇宙人生〉の語などに「牛肉と馬鈴薯」の感化が認められる。

また、この前年の明治四十年に、やはり精二に書いた書簡が残っている。曰く、

御身は夏目先生の野分をよみて如何の感ありしか高柳が悲惨なる苦痛ハ今日多くの文学士連によつて実験せられつゝあるなるべし。樋口一葉、斎藤緑雨の如き偉なる天才すら苦悶の中に一生を終りしが如し、一葉緑雨の才なくして文学者たらんものハ非常の苦痛を予想せざるべからず、非常の抱負、忍耐なかるべからず、軽々しく純然たる小説家たり著述家たらんとするハ危険なりと云ハざるべからず

とあり、四つ年少の弟の進学相談に対して、兄として先輩として誠意をもって説得にあたっているのであるが、文学で身を立てることの困難さを諭す言葉の端々に、小説家になる覚悟を自ら確認しようとしている谷崎を見ることができる。

五年前、谷崎家は父の事業失敗で零落し、兄は築地精養軒主人北村家の書生兼家庭教師として住込んで一高に通い、弟は昼間勤めて夜学の工手学校に通っていた。同書簡に見える〈ゴルキーハ一銭蒸汽の水夫より

起りイブセンハ商売の丁稚より名を成せり〉などの一節は、文豪の例を引いて弟を励ましながら、今の貧困から文学でもってはい上がろうとする兄の悲痛な願いでもある。この書簡には一月二十一日の日付がある。そして、翌二月、谷崎は一高の文芸部委員に選任されている。高等学校とはいえ、二十二歳の青年が文学に専門的に関わっていくことになる。その任期は一年間であったが、小説家を目指す習作時代として、注目すべき一年である。

第一高等学校『向陵誌』（大14）の「文芸部部史」明治四十年の項に「部長　杉敏介／委員　田中徹、谷崎潤一郎、岸巌、行森昇、杉田直樹」と記されている。同窓の津島寿一は、〈校友会雑誌は文芸部委員の手によって編集されるのであるが、生徒のうちから文才があり、この仕事に堪能な人が選任された〉（『谷崎潤一郎君のこと』昭40）と述べている。谷崎は東京府立第一中学校（現東京都立日比谷高校）時代から「学友会雑誌」に多くの論説や創作を載せていたことから、谷崎の文才はすでに評価されていたとみてよいだろう。その仕事は編集の外に、創作の発表、掲載作品の批評、学校行事を取材して記事にするなど、月刊の校内誌としてはかなり本格的な内容である。

明治四十年、谷崎は「校友会雑誌」に三篇の創作を発表した。「狆の葬式」（3月）、「うろおぼえ」（6月）、「死火山」（12月）で、いずれも谷崎の書生時代に材を取る自伝的要素の濃い作品で、主人公は谷崎自身とみてよい。各々の梗概を記しておく。

「狆の葬式」（「校友会雑誌」一六五号。分量は全集本で十四頁）

ある朝、一匹の犬が〈運悪く〉撲殺されるところへ、〈運悪く〉遭遇した己は〈何か身にふりかゝる災難の前兆であらう〉と心配になる。殺された犬の見開いた眼が頭から去らぬ己は食事も喉を通らない。同日の夜、今度は己の書生先の養犬の狆が心臓病で死ぬところへ立ち合う羽目になる。狆の〈思へば測り難き運命〉を思う。〈二度ある事は三度あると云ふから今度は戌の年の己がやられるのぢやなからうか〉と不安にかられるのである。（筆者註、谷崎は明治十九年、戌年の生れである。）

ここには、〈運〉〈運命〉の語がいくつか出てくることに注意したい。また、谷崎が、〈私はその頃の文学青年に共通とも云ふべき世紀末的病的思想の影響で激しい神経衰弱に罹り、絶えざる強迫観念、――「死の予感」に悩まされ通したものである〉（『小山内薫全集』第一巻「解説」昭4）と述べているように、当時の時代の雰囲気をよく写している。この強迫観念が「狆の葬式」のモチーフであり、後の戯曲「信西」のモチーフでもある。谷崎にとって初めての短篇小説の発表である。同誌次号（一六六号）に次のような批評（評者行森昇）が出た。〈一篇を通じて主観的な写生文〉であり、〈殊に犬殺の物凄さ光景、死んだ犬の眼球の恐ろしさ真に逼り思はず戦慄致候〉と描写については褒められた。たしかに描写が緻密でディテールがよく描けていて、一読に耐え得る一文である。

「うろおぼえ」（「校友会雑誌」一六八号。全集本で十頁弱）

己が九歳の折、父が商売に失敗、零落していく生家の〈拙い運命〉は如何ともしがたい。夫を余所の女に奪われた叔母。〈渦巻く濁流の中に陥りつゝ、もがいて居る憫な運命を持つ人〉のあることを知った主人公は、〈きのふと云つてあすが日知れぬは人の運命〉を思う。父も叔母も悪人ではないが、〈叔母や父の拙い運命〉は如何ともしがたい。〈運よく〉紳商の家に引き取られ、就学可能となった主人公の、〈己は今年二十二だ。其の間に父も、母も、叔父も、叔母も、皆著しく変つて了つた、思へば拙い運命を持つて此の世に生れた人間の中に、育つた己の運命は亦どうだらう。〉という述懐で締め括っている。

次号（一六九号）の評者（岸巌）は、〈「零落」の悲惨を眼前に見せられる心地がする〉と、先ず人物及び情景描写の確かさを褒め、〈総じて君の筆はのび〳〵として、前の「狆の葬式」と云ひ、この篇と云ひ老練の致を極めたものであるが、ちょい〳〵拵へ過ぎたと思はれる書き振り〉があるとする。ここで指摘された文章の〈老練〉さは、のちに荷風が評価した〈文章の完全なる事〉（前掲文）に通じ、〈拵へ過ぎ〉は谷崎がその重要性を主張する小説の構造的美感に通じるもので、谷崎文学の特徴がすでにここに見えていることが指摘できる。

「死火山」（「校友会雑誌」一七一号。全集本六頁強。だんだん枚数が減ってくる）

親とも別れ、書生として暮らす我が身の辛さに、〈浮世と云ふものゝ冷かさ、貧といふものゝ口惜しさ〉から、自分を蔑む世の人々を見返してやろうと学問に励むが、〈愛もなく歌もなく〉味気ない日々。書生先の小間使いに恋をして相愛となるが、その娘は義理あって余所へ嫁ぐことになり、〈これも運命なり〉と別れを甘受せざるを得ない。この悲恋を小春紙治、おせき録之助に擬して、〈運命の神の御手に編まれたる宿命〉を怨み、嘆くばかりである。

前二篇が口語文体であったのに対して、「死火山」は擬古文体である。書生先の小間使いとの恋愛事件という内容を考慮したのか、あるいは、詠嘆的に心情をのべるにはふさわしい文体と思ったのであろうか。次号（一七二号）の評者（田中徹）は〈文は実に美しい。が、取材が陳腐で描写も普通、想に縦横の馳奔なく筆に平生の精彩を欠いて居る〉と厳しい。しかし〈極めて自然で無理の無い事件の発展をなだらかな抒情文の上に描き出した〉点は評価している。また〈画かれたる未来を奪ふ運命の前に自己を捨てゝ結ばれざる愛の〉〈美しさ〉にも言及している。的確な評言である。

このように三篇とも共通して〈運〉、〈運命〉の語が用いられている。この〈運命〉は哀しみをもたらす巡り合わせ、非運を意味している。主人公はそれと戦うこともせず、不可抗力の宿命として受動的態度であったことが共通している。

谷崎のこうした〈運命〉を悲観する傾向は、府立一中在学中の明治三十六年十二月（谷崎18歳）、校内誌「学友会雑誌」に書いた自叙伝「春風秋雨録」や、翌三十七年五月の論説「文芸と道徳主義」にすでに現れていた。「春風秋雨録」では、

ものゝ本など読まるるやうになりてはひたすらに西行芭蕉があとをしたひ、世はうきもの、あぢきなきものと思ふ心は胸にみちて、方丈記を繙きては長明が侘住居のさまを羨み、山家集をよみては西上人が行脚のあとを恋ひ、あるは平家物語なる「ほとゝぎす花橘の香をとめて」とよみたまひし建礼門院の生涯に涙をそゝぎ

と述べているように、〈諸行無常〉を描いた「平家物語」の中で、最後まで生き残ることで最もその非運を体現し、「平家物語」において〈天運つきて人の力にをよびがたし〉、〈悪縁にひかれて御運既につき給ひぬ〉（岩波古典大系本本文に依る）と述懐する建礼門院に注目している。引用している歌の下の句は〈なくはむかしの人や恋しき〉（灌頂巻）である。この歌には非運の建礼門院に仮託した谷崎の共感がこめられている。谷崎の非運を思う原因は父の事業の失敗にある。「春風秋雨録」にはその父が谷崎を説諭する言葉が写されている。

富める家の子弟等は、これより中学の過程ををさめ、尚高等の学術を極むることもやあらむ。汝の望む所もまたげにさこそあらめど如何にせむ、あゝ、我昔の如き富裕の身にてあるならば、汝の望もかな

はすべきも、不幸にして商業に失敗したる今となりては、それもかなはず。たゞ天運とあきらめて今より直ちに商店に雇はるゝか、銀行会社に通ふか、いづれか一に定めよかし。立身出世はたゞ学問によるとなおもひそ。無学なる賤しき身より起りて、巨万の富をなしゝ例も少からぬものを

〈中学に入る能はずして商売に入る〉ことが谷崎にとって最も悔しいことなのである。父の言葉を直接話法で記録することで、谷崎は悲しさ、悔しさ、憤りを表したのである。

次の論説「文芸と道徳主義」には次のように記している。

予や不幸幼にして人生の災禍に遭逢し、貧困の中に育ちて運命の神の手に奔弄せらるゝこと茲に十九年、社会の下層に呻吟して恩人の慈悲にすがり、中学に通へる一介の貧書生に過ぎざるも、而も時に胸中に不平満々として僅に荘子、ニーチェを思うて自快となし、鬱屈を遣る時なきにあらず。

この慨嘆も自分が〈貧書生〉であるが故である。ここに谷崎における〈運命〉の意味するところが見えている。谷崎は悲運の境涯に酔っているかのようである。というのも、〈一介の貧書生〉ではあっても、他人の〈慈悲〉により、ともかくも就学が叶えられているからこそ、自己劇化し、こう言い得るのである。現に一中生で、「学友会雑誌」に文章が書ける身分である事実は看過できない。つまり、谷崎は〈運命〉を客観視できる位地にいた。

右の論説と同じ号に載った韻文「述懐」に〈師〉（小学校の恩師稲葉清吉か）が、〈あまりにをしき才なれば　簿記の筆をばなげうちて（中略）聖の道を学べかし〉と言ったと記す。おそらく本当にあったことであろうが、自ら〈あまりにをしき才〉と言い放つところに谷崎の自身への多大な自負が読み取れる。また、曰く

おのれ聖とならんにも　あまりに迷多くして
われ詩人（うたひと）とならんにも　あまりに才の鈍くして。

わが吐く息に炎あり　おのが心にまどひあり
人をつめたくあさましく　世をうらめしくあぢきなく
思ひみだれてこのごろの　すねたる身とはなりにけり。
（中略）
あゝ君ゆるせ三尺の　つるぎは腰にあらずとも
（中略）
文をしかゝばいつはりの　世とたゝかはむおのが願を。

〈人生の災禍〉〈貧困〉を〈運命〉と〈すね〉ている自分ではあるが、〈文〉を〈つるぎ〉として、拙い〈運命〉や〈世とたゝかはむ〉〈願〉を持ち始めているところに注目したい。しかし、〈あまりにをしき才〉とは矛盾するが、〈才の鈍くして〉という不安もあったこともまた事実であろう。学生として、多少なりとも学問を積み、〈貧学生〉である自分を僅かながら客観視できるようになってはきたものの、一年後に一中卒業を控えた〈貧書生〉には、来年も学生である保証はなかったのである。

貧乏ではあったが一応就学が叶い、己が境遇を客観視できるようになり、初めて谷崎に〈運命〉という概念が生まれてきたと思われる。では、いつから〈運命〉を言い、意識するようになったのか。

二

谷崎少年にとっての最大の悲劇、悩みの元は貧困であった。明治二十七年（谷崎9歳）、日本橋の阪本尋常高等小学校尋常科にいて、首席で第二学年に進級した年、父の家業失敗により、生家は貧困へと転落した。これが谷崎家零落の始まりであった。その影響は先ず、明治三十一年四月（谷崎13歳）、高等科在学中に仲間と作った筆写本回覧雑誌「学生倶楽部」第三号に書いた掌篇「五月雨」に現れる。（これは懸賞小説で第貳等とある。筆名は「谷崎笑谷」とあり、分量は全集本で二頁半）

吉田金次郎は父の死後、〈段々ト貧乏ニ成リテ〉学校を退学して、下駄の歯入れ屋をしている。ある日、ある紳士の紙入を拾うが、礼も受け取らず立ち去った。紳士は金次郎の正直に感心して、〈金次郎ヲ引キ取リテ後ニ金次郎ハ百万円ノ身代トナリケリ〉と終わっている。金次郎というネーミングといい、貧しい少年が金満家になるという夢物語といい、むしろ他愛無い話であるからこそ、十三歳の少年の貧困から抜け出したい切なる思いが伝わってくる。

谷崎家はなお貧しく、父は潤一郎を商店の小僧にしようとしたが、潤一郎の希望と恩師稲葉先生の強い勧告により、府立一中に就学が叶った。が、二年に進級した年、父の再度の家業失敗は学校を続けるために、書生として他家に住込むことを余儀なくしたことはすでに述べた。

先に言ってしまえば、明治四十年の習作三篇は〈運命〉という観念をテーマとして書かれた。宿命として、〈運命〉に対して受け身の主人公たちであった。幼少期に取材した自伝的作品[3]には、〈運命〉という言葉や非運を嘆く箇所が散見し、幼少期に刻み付けられた谷崎の〈運命〉に対する拘りは無視することはできない。その中で注目されるのは大正五年から六年に集中して発表された自伝的小説「神童」、「鬼の面」、「小僧の夢」、「異端者の悲しみ」である。これらの主人公たちの口にする〈運命〉は習作期とはその内実が変化している。つまり、負から正へ、受動的態度から能動的態度への転化である。この転化の原因を「小僧の夢」（大6・3～4）の主人公庄太郎が語ってくれている。

> まあ己なんかは小僧の中で運のいゝ方なんだ。考へて見ると、己が自分の境遇を呪つたりするのは、我が儘過ぎる話なのだ……けれども或る一人の人間の境遇が、幸福になり不幸になるのは、主として其の人の客観的の位地に依つて決するのではなく、寧ろ彼自身の主観の状態に依つて決するのだ。

何と明晰な解説であろうか。簡単に言えば、気の持ちよう、ということである。幸田露伴「運命と人力と」（「成功」明43・10）に、〈好運否運〉は〈人間の私の評価を附したるに過ぎ〉ず、〈人力と好運とを結び付けたいので、人力と否運とを結び付けたくない〉のが万人の欲望であり、〈成功者は自己の力として運命を解釈し、失敗者は運命の力として自己を解釈して居る〉のであると、簡明な説がある。これを谷崎が読んでいたかどうかわからないが、ちょうど明治四十三年の文壇登場の頃の〈運命〉には、習作期とは違った意味が付与されていくのである。

文壇登場後の谷崎は〈運命〉を客観的に見られるようになった。それは〈文〉で〈たゝか〉う作家になる夢が叶ったからである。先に筆者は、貧しくても就学が叶い、貧しさを客観視できるようになったことで、初めて谷崎に〈運命〉という観念が生まれてきたと言ったが、これも同じメカニズムである。前田久徳氏は「『異端者の悲しみ』のモチーフ」（「文学」平・2・7）で、谷崎の異端者意識について論じ、文壇で地歩を築き、〈彼の存在が社会的に容認された時点で、存在が担った負性は、彼の意識内部に於ては消滅し〉、〈負

性が正に転化され、積極的な価値すら付加され〈るようになっていると、明確に解きあかしている。このような価値の転化は習作時代には見られない。〈運命〉の価値の転化について、自己分析できるまでには約十年必要だったのである。

中村光夫が、谷崎には〈荷風のやうな半生の体験に裏付けられた批評的信念がある筈はありません。また谷崎の資性がその個性的体験を無償の思想に育てる能力をおよそ欠いてゐる〉（『谷崎潤一郎論』昭27）と言うように、習作時代の谷崎にとって〈運命〉とは単に貧乏を託つ不遇な身の上の謂で、それを超克する思想的基盤を持っていなかったし、その表現方法も手に入れていなかった。津田左右吉は仏教の宿命観に支配されている平安朝人について、〈運命といふことは、人生を思索するものの必ず逢着する観念である。けれども、平安朝人は広い人類の上から見たのでも、深い人生の根本から考へたのでも無く、たゞ自己の目前の盛衰浮沈についての感じである。従つて運命に泣く涙は極めて利己的のものに過ぎない。〉（『文学に現はれた我が国民思想の研究』大5）と言う。この津田の説はそのまま谷崎のばあいにも援用出来よう。習作時代の谷崎は〈運命〉に対して皮相的であり、受動的であった。その皮相性は〈運命〉を言うよりも、〈貧困〉を苦にする厭世的心情を言うべきであったところに起因する。〈小僧〉であることが、貧乏が厭だったのである。〈あまりにをしき才〉というプライドが許さなかったのである。端的に言えば〈金の問題〉である。前述した一連の自伝的小説から引用する。

○自分のやうな天才が、商店の小僧などにならう訳がない。自分は必ず、何とかして学問をやり通さねばならぬ。又やり通すべき運命に立つて居る。天が自分を捨てないならば、いかほど俗人共の妨害が這入らうとも、遂にはきつと自分の値打ちに適しい運命が自ら廻つて来る。（「神童」大5・1）

○「あゝ金、金、要するに金だ。金さへあれば凡ての人間の欲望は達せられる。金がなければ学問をしたつて何にもならない。若し神様が智慧と宝と二つのうちを選べと云つたら、自分は直に宝を所望するだらう。さうして見ると、己は生れながらにして不仕合はせな人間なのだ。（中略）生涯碌々として、他人の栄華を羨みつゝ、空しく墓へ行つてしまふのだ。此れもみんな運命だ」（「鬼の面」大5・1～5）

○一番社会のどん底へ堕落するだけ堕落して見るのも面白い。果して天才の素質を備へて居る運命の寵児であるならば、一度はどれ程零落しても、必ず再び浮かび上るに極まつて居るから。（「鬼の面」）

○「世の中の出来事は凡て偶然の寄り集まりだ。成るやうにしか成らない（中略）。無精をする為めに己の運命が壊れるものなら壊れて見ろ。」（「鬼の面」）

○己は幼い時分から、極度に貧窮な家庭の暮らしを見て居たので、生活難の問題が非常に鋭く頭を刺激した。（中略）食ふと云ふこと、即ち金を得ると云ふ事が、生きて行くのに第一の必須条件であると思つた。（「小僧の夢」大6・3～4）

○富裕な身の上が羨ましかつた。（中略）彼等に対して自分が持つて居る弱点の原因は、悉く金の問題に帰着するのである。金さへあれば、学識の広さでも頭脳の鋭さでも、自分は決して彼等に劣つて居るのではない。況んや自分には、彼等の到底企及し難い芸術上の天才がある。（「異端者の悲しみ」大6・7）

長い引用になったが、谷崎の抱える問題の根本に〈物質慾〉、〈金の問題〉があったこと、また前述の如く、〈運命〉の価値が負から正へ転化しているのを見るためである。再び津田（前掲書）に従えば、武士の運命観について言う〈「運に任せて」事をしようとする能動的態度〉が谷崎のそれにあたる。むしろ、〈己の運命が壊れるものなら壊れて見ろ〉と〈運命〉すら従えようとする語気の強さに、自己の才能への自負の強さを

感ぜずにはいられない。これは華々しく文壇登場を果たし、非運を克服して、念願の小説家になれた人であるから書けた文章であることは言うまでもない。自己劇化できる客観的視座を谷崎は得たのである。

「鬼の面」には、〈幸福の神から見放されて、逆境に墜ち〉た父が〈「何事も運が悪いのだから仕方がない」〉と言うのに対して、〈決して運が悪いのではなく、父自らが招いた不仕合せに違ひなかつた〉という見解が述べられている。〈運命〉を父は負の方向で、青年壷井は正の方向で受け取る人物として対比して見せている。〈運命〉の価値転化の跡がよく見えている。

谷崎の逆境はひたすら父のせいであり、これにより愛する美しい〈四十に近き母上は、顔色やつれて色褪せたる髪をみだしつ、習はせたまはぬ賤しき業に、たゞ齷齪といそがしく〉（「春風秋雨録」）所帯染みてしまった罪さえ、少年は父におっかぶせるのである。「異端者の悲しみ」でも、「鬼の面」同様、父について、〈責任は父の無能と不見識とに帰着するにも拘らず〉、〈律義で頑固で小心な彼は、消極的な道徳さへ守つて居れば、人間としての本分は完うされたので、其れ以上の幸不幸は凡べて運命の仕業であると、観念して居るやう〉な人物であると、主人公に言わせる。とすれば、〈道徳〉などというものには何の価値も力も無いということになる。ここは父を通して主人公章太郎の価値観を述べている件でもある。

前掲の論説「文芸と道徳主義」は高山樗牛の美的生活論に感化され、荘子やニーチェの思想に言及し、〈現代の小理想偽道徳に反抗し、人間の大理想を齎すの人、今や一度出現せざるべからざる也〉と結んでいる。谷崎自らその〈人間の大理想を齎すの人〉たらんとする意志が見える。当時谷崎には哲学者宗教家になるという希望があったようで、それは初期文章にも認められる。後年の作品「彷徨」（明44）でも、ついには断念するが、〈宗教家哲学家を以て世に立たうと云ふ決心〉を持つ主人公の言葉に、また「神童」の〈偉大なる宗教家となつて人格の光りを世に輝かす積りであつた〉と言う主人公にも、その痕跡が認められるのである。この経路は「麒麟」（明43・12）に象徴的に示されている。孔子の〈徳〉と南子の〈悪〉との対立の構図における、〈悪〉の勝利は谷崎の進んでゆくべき道を自覚した結果において書き込まれたのである。

三

次に〈運命〉に関連して、谷崎の歴史への興味を見ていきたい。「青春物語」（昭7～8）の〈中学時代から樗牛にかぶれて美的生活を論じた〉という言を俟つまでもなく、谷崎の初期文章や論説には高山樗牛の影響が見られる。千葉俊二氏は「狐・ニーチェ・マゾヒズム」（「文学」平2・7）で、谷崎への樗牛の〈影響感化〉に触れて、谷崎文学を考えて行く上で〈人生の至楽は畢竟性慾の満足に存する〉という美的生活論は無視できないのではないか、と述べているが、筆者も同感である。明治三十四年八月（谷崎17歳、一中時代）に出た樗牛の「美的生活を論ず」は谷崎の道徳観、幸福観に影響を与えたと同時に、結尾の〈悲しむべきは貧しき人に非ずして、富貴の外に価値を解せざる人のみ〉、〈貧しき者よ憂ふる勿れ。望を失へるものよ、悲む勿れ。王国は常に爾の胸に在り〉という文言に、〈貧書生〉は勇気づけられたのではないかと思う。

谷崎の歴史趣味も樗牛に感化されたのではないか。例えば、「平家雑感」（明34・4）は没落していく平家の運命と軒昂たる入道相国を歌いあげた滅びの美学ともいうべき一文である。変革期の歴史の面白さは誰をも引き付けるものであるが、歴史の間に非運を生きる人間像は、谷崎の境遇に共鳴し、自らの非運に重ね合わされていったのではないか。[3] この一文に〈運命〉の語が多く出ているから、谷崎の使う〈運命〉の典拠だ

というわけではない。〈諸行無常〉はすでに谷崎自身、身に染みていたことである。ただ、樗牛に感化され、中世史にも関心を持ち始め、〈運命〉ということにも思いをいたすようになったと思われる。

また、一高の「校友会雑誌」を見ると、和辻哲郎「炎の柱」（明40・2）、大貫晶川「花散る夕」（明41・5）ほか、谷崎以外にも〈運命〉を描いた創作が散見でき、一種の学生たちの間の流行であった。その空気は〈センチメンタルな〉〈藤村操流の厭世観〉（「青春物語」）であった。

谷崎はもとより歴史好きの少年であった。明治三十五年（谷崎17歳）、雑誌「少年世界」に投稿した「時代と聖人」が三等に入賞した。マホメットやルーテルを論じ、人間の意志を超越した天運や時代の流れが人間を形成してゆくという認識を述べ、〈聖人は時代の産物也〉と結論する。

明治四十一年（谷崎21歳）四月、「学友会雑誌」に論説「増鏡に見えたる後鳥羽院」が載った。樗牛の「菅公伝」（明33）を引きながら、

> 故高山先生嘗て菅公論を草し、菅公を以て政治家の才にあらず、日本有数の漢詩人なりとして其の政治に失敗し、筑紫に配せられて詩歌に想を馳するを得たるを寧幸福なりと云ひき。後鳥羽院亦かくの如し。院は文学に於いて話せるお方也。政治に於いては話せぬお方也。運命の神は能く個々の人間の特性を知る。

と、ここにも〈運命〉の語が見えている。この後鳥羽院への谷崎の共感は、自ら文学を志すものとしての自身を、不遇な後鳥羽院に重ね合わせているところから生まれたものであろう。〈予も断然政治をすてゝ文学に志すべし〉という宣言が思い出される。

しかし、ここに見られる〈運命〉は習作三篇に見えていたそれとは、その内実に変化が見られる。前掲の「神童」「鬼の面」等に近い意味になってきている。つまり、自分には天命により、文学の才能が授けられており、その才能は開花する運命にある、と。〈運命〉というものに対して受動的であった谷崎は、徐々に〈運命〉に能動的に働きかけてゆく方向に転換しつつあった。この論説と同時期に書かれた、前引の弟精二宛書簡にあった〈文学に志すべし〉と言い、〈須く真率に、真摯に、真面目に宇宙と人生とに対せざるべからず吾人はまず醒むるを要す〉という決意を思い出す必要がある。〈鎌倉時代は日本国民が長き惰眠より覚醒して真率真面目なる新生涯に入りし時代也〉と書き起こす右の論説とこの書簡とはその口吻から見てわかるように、[1] 文学者として立つ決意を表明した同根のものである。

*

谷崎は右の論説で、新時代としての鎌倉時代に最も興味があると言う。将門記、保元平治、平語、愚管抄、正統記等を挙げ、殊に人間の性格、〈活ける人間〉を描き得ている大鏡、増鏡の鏡類を愛すると言う。こうした点から、すでに初期の戯曲（史劇）が準備されつつあることがわかる。確かに栄枯盛衰、諸行無常の歴史は、谷崎が身を以て痛感した〈運命〉によって変転する人生を盛るには恰好の器であった。

関西移住（大15）後の谷崎は「恋愛及び色情」（昭6）や「源氏物語」の口語訳に見られるように、平安朝文学に傾倒してゆく。その意味でも、この時期の中世史、特に変革期への興味は自らの生活の変革を望む心と響き合い、無視できない。また、「増鏡に見えたる後鳥羽院」に見える時代認識は、〈皮相的文明を打破して〉〈本邦史上の一大進歩を現わしたる時代〉と述べる原勝郎『日本中世史』の鎌倉時代に対する認識と類似している。原の本は明治三十九年の出版で大変評判になったし、谷崎在学中、一高で歴史を講じていたことから、谷崎の中世史への傾倒に樗牛以外に、原先生の影響もあったのではないか。後述する「信西」の人

物形象にも同書で原の説く信西像が影響していると思われる。

＊

明治四十年の習作以前は、人生の〈真面目〉を見ようとはせず、ただ拙い〈運命〉を悲しく歌うばかりであった。その惰眠の状態から醒めて、苦に呻吟する人間を〈真率〉に見つめて、それを書くという行為を通して、自らの新しい文学的生命を切り開いてゆこうとしたのが、谷崎の明治四十一年であった。〈運命〉は谷崎の描くべきテーマとして持続されてゆくが、〈運命〉そのものを描き、それを悲観するのではなく、〈運命〉によって変転する人生を描く方向へ、その内実が変化しつつあった。個人の力では如何ともしがたい〈運命〉をも自分の力で切り開こうとする変化が、谷崎の中で生じつつあった。[5] ちょうど一高卒業、帝大入学を目前にして、進路決定が迫られていた。

四

谷崎は明治四十三年九月、小山内薫を編輯兼発行人とする第二次「新思潮」創刊号に「史劇」と角書きした一幕物「誕生」を載せた。これは谷崎も〈作者が昔文壇へ出た時の処女作は、栄華物語から材を取った『誕生』と云ふ戯曲であつた〉（「盲目物語はしがき」昭7）と自ら認める文壇処女作である。谷崎は何故、史劇というジャンルに自己の文学を求めたのであろうか。その理由について二三考察をすすめたい。

「狆の葬式」を発表した「校友会雑誌」一六五号（明40・3）に、谷崎の史劇観を述べた文章[6]を掲げている。これは同誌上で三人の学生の間で繰り広げられた史劇観論争を谷崎が締め括ったものである。三者の論点が史劇の概念規定にあったのに対して、谷崎は史劇を創作する立場からの発言であるところに特徴がある。曰く、史劇はまず、過去の時代的、歴史的特色を出すことが第一で、その時代的特色は観客の聴覚と視覚に訴えるのが大切であり、作品のテーマはそれらを通して自然に観客に伝わるのがよい。時代的特色だけでも楽しめるものであるが、その特色さえ出していれば、その上にどんな空想を入れるのも自由である。しかし、作中人物やその行動には歴史的意義を持たせるべきで、主要な人物については必ず史籍に依らなければならない、と。[7] すでに谷崎には史劇創作の意図があったのかもしれない。そして、これは単なる史劇観に留まらない。つまり

実際的美換言すれば官能的快感の美感たり得べき一部即ち聴官視官に由りて感ずる美は芸術を賞翫するに重大なる要素にして、所謂理想美も此の官能的美を介して後に感ぜらるべきものたり。

とあり、女性の官能美を描くことをその文学的使命とした谷崎文学の萌芽をすでに見ることができる。しかし、谷崎はまだ描くべき対象としての〈女性〉は発見していなかった。

次に題材としての現代物について見てみたい。習作の三篇は神経衰弱、人間の運命、失恋の苦悩など、身辺に取材した写実的な小品であった。そして、「新思潮」第四号（明治43・12）の消息欄に、〈谷崎は初めて現代に材を取つた小説を書く。実はこの方が本領〉だと予告された「彷徨」は、予定より原稿提出が一ヵ月も遅れ第七号に掲載されたが、途中までしか書かれず中絶した。これは失敗作で、谷崎が身辺を写実的に書こうとするとき、歴史物を書くときに比べて、別人のように未熟であったことを証明している。

描くべきテーマとしての〈運命〉は手にしていたが、その表現形式を手に入れていなかったといえよう。逍遙の史劇観や「桐一葉」の成功など、史劇の流行は続いていた。かつて史劇観をまとめたように、史劇については自分なりの方法論を持っていた谷崎が史劇創作に進んだのはごく自然であった。しかし、荷風が〈史

劇はいくら内容が新しいにしても其の舞台面の外観に於て、此れまで吾々の見飽きた時代狂言に似通った処が多くあ〉り、〈現在及び近き将来のわが劇界に向つて最も有力に清新なる空気を注入すべき戯曲は〉〈史劇ではなくて社会劇問題劇であらう〉〈「紅茶の後」明43・10）と述べる如く、時代は谷崎の傾向からやや逸れつつあった。

当時の文学者にとって、現代物を創作し、発表することを困難にしている外在的要因が検閲制度による発禁処分である。荷風が自分の理想とする〈真の社会劇〉への障壁は〈登場脚本の検閲を掌る警視庁〉で、〈花よ鳥よと唯だ綺麗な文字を並べて当たり触りのない史劇を書くより仕方があるまい〉、〈絶望なるかな〉（前掲文）と嘆かざるを得ないような時代状況であった。これは谷崎もひしひしと感じていた。「刺青」掲載の「新思潮」第三号（明43・11）に「REAL CONVERSATION」という同人和辻哲郎、木村荘太、谷崎の鼎談がある、「刺青」の原稿を見ながら、〈好い句が思ひ切り悪さうに抹殺してある。無惨至極だ〉、〈成る程肌といふ字が皮膚と直つている〉、〈そりやあまだいんだ。此れなんざあ作者の無念さ思ひやられるぢやないか「眠れる肌は柔らかに一本一本尖つた針の鋒端を啣むだ。」〉と言い、検閲制度への憤懣が表出している。谷崎自身、「刺青」は〈発売禁止が怖しさに、原作と違へて大分削り取つた〉（『『少年世界』への論文」大6）と述べている。文学的血族と見做す荷風の『ふらんす物語』（明42・3）、『歓楽』（明42・9）や鷗外「キタ・セクスアリス」（明42・7）と相次ぐ発禁、そして雑誌「太陽」（明42・8、43・10）に見られる発禁をめぐる特集などから明らかなように、時代の社会的重圧が、荷風の言う如く、〈当たり触りのない史劇を書くより仕方があるまい〉と、谷崎にものしかかっていた。

次は一幕物についてであるが、この年は、鷗外が〈比較的一幕物が多かつた。そこで「一幕物の功過」と云ふ様な事が云々せられた〉（「芸術界の明治四十三年」明43）年であった。荷風は一幕物に流れざるを得ない時代状況を前掲の如く述べていたが、逍遥の「桐一葉」の見事さに触れ、〈ちぎれ〳〵の一幕物なんぞ書いてゐる今時の若い者達にはとても出来た仕事ぢやあるまい〉（「紅茶の後」明43・11）と批判的である。そういう荷風も明治四十三年九月、一幕物「平維盛」を発表、〈材料も古い形式も古い〉〈拙き〉戯曲（「紅茶の後」明43・10）と自嘲している。面白いことに、谷崎の「誕生」掲載の「新思潮」創刊号には和辻哲郎も「常磐」という一幕物を載せている。小山内の自由劇場の運動とも連動して、ともかく若い作家たちの間で一幕物が流行していた。鷗外も〈試作には短い物が好い〉（前掲文）というように、一幕物は人生のある一刹那の対立を捉えて、人間や人生を浮き彫りにできる形式であり、谷崎の持ち越してきたテーマ一刹那（偶然）による変転、〈運命〉を入れるに相応しい器であった。そして谷崎の初期戯曲「誕生」、「象」、「信西」すべて一幕物であった。

この史劇という戯曲形式には谷崎の文壇への野心が込められていた筈である。文学青年が文壇へ出たいというのは当然である。中島氏（前掲文）がすでに、谷崎が〈小山内薫との関係を志向〉していたと指摘するように、第二次「新思潮」発刊に際して、偶然知遇を得た〈文壇にも劇壇にも幅をきかせてゐた〉（「青春物語」）小山内を通して文壇へ出ることを夢想するのは自然である。「青春物語」に文壇登場前夜の消息が興味深く書かれている。谷崎は〈文壇へ進出する手蔓〉が欲しかった。〈栄華物語から材料を取つた純国文趣味の戯曲「誕生」を書いて、「帝国文学」へ送つたが、これは見事没書に〉なり、〈それで悲観して今度はいくらか自然主義に妥協した「一日」と云ふ短編〉（筆者註、現存せず）の、「早稲田文学」への掲載を人を介して頼んだが〈握り潰された〉。和辻哲郎から第二次「新思潮」同人に誘われた谷崎は、これこそ登龍門とす

べく一高の学費を援助してもらっていた親友笹沼源之助に、その資金援助を申し出た。〈「これさへあれば僕は必ず文壇へ出てみせる。これで僕の運命が開ける。さう云ふ大事な金だと思つて融通してくれ」〉と。この〈運命〉はプラス指向である。

〈自分は物質的には笹沼の援助を得、社会的には小山内氏の援助を得て文壇に出たと云つていゝ〉と谷崎が要約しているように、はたして思惑どおり「新思潮」は文壇へのステップボードとなった。荷風の「谷崎潤一郎氏の作品」が載った「三田文学」を〈持つてゐる両手の手頸が可笑しい程ブルブル顫へるのを如何ともすることが出来なかった〉、〈私は胸が一杯になつた。足が地に着かなかつた。そして私を褒めちぎつてある文字に行き当たると、俄かに自分が九天の高さに登つた気がした。往来の人間が急に低く小さく見えた〉、〈これで確実に文壇へ出られると思つた〉という四十七歳の谷崎が二十年前のことを記す「青春物語」のここの件はつい昨日の事のように鮮明で、かつその喜びが如何に大きかったかを伝えている。どうしても文壇へ出たい谷崎の強い思いが理解できるのである。

五

次に谷崎の初期史劇に散見する〈運命〉について考察したい。

「史劇　誕生」は後一条帝の誕生を描いたもので、暗から明へと転換する、当時流行の気分劇の構成をとっている。明への転換は、この戯曲では、藤原道長にとってその娘彰子から帝の男皇子が生まれるということにある。

まず、周辺事情を告げる〈女房〉が登場し、

女房の一　ならう事なら男皇子をと誰しも願うて居りますが、女皇子やら男皇子やら今の中から判りませぬ。

女房の二　何の其れが今から判らいでか。今日此頃の大殿の御運の強さを御覧じませ。去ぬる長徳の流行病に御兄君はお二人ながらお薨れ遊ばし（中略）大殿ばかりは愈〻栄え時めかれるではござりませぬか。この勢いでは必定男皇子が御誕生遊ばすでござりませう。

と言う。これによると男皇子の誕生は道長の〈御運の強さ〉によって保証されている。道長の権勢はその政治力によるものである。そして男皇子誕生は歴史の偶然であり、それはまた所謂道長王朝の第一歩でもある。しかし、男か女かということはいくら道長としても如何ともしがたいものであるが、その強い運で男皇子誕生を導いた、というのが谷崎の認識である。後半で道隆が悪霊として登場し、〈運拙くして長徳の世の疫病に、陰府の人となりぬる口惜しさ残念さ〉と言うに至って、もはやテーマは明瞭である。すでに見てきたように習作の拙い〈運命〉を嘆く姿は消え、この戯曲には〈運命〉に対する能動的態度、つまり歴史の偶然という〈運命〉を必然に変えてしまう強い力が描かれており、文学で自己の〈運〉を切り開いていこうとする谷崎の姿もその延長上に見ることができる。

しかし、一、二の批評があるくらいで、「新思潮」創刊号が発禁になった事情を考え合わせても、殆ど無視に近い。この「誕生」は前述の谷崎の史劇観に忠実に作品化されていた。谷崎本人は後年、〈今日になつてみると、「刺青」には歯の浮くやうなところがあるが、「誕生」にはそれがない。私は寧ろ此の方を気恥かしくない心持で読み返すことが出来る〉（「青春物語」）と控え目ではあるが、作品の出来には満足している。しかし、当時の谷崎はそんなにのんびりと構えていた筈はない。結局七号まで出た「新思潮」も、当初は三号まで出せればよいと、同人たちは思っていた。その僅かのチャンスに〈これさへあれば僕は必ず文壇へ出

てみせる。これで僕の運命が開ける〉という谷崎が、自信のない作品を、たとえ前述のような小山内を通じての胸算用、野心があったとしても、出すわけがない。しかも、やっとつかんだチャンスの一等最初、創刊号に、である。このような状況からみても「誕生」は谷崎にとって、当時の最も自信作でなくてはならなかった。「誕生」の暗から明への転換は、谷崎の〈運命〉のそれでなければならなかった。その願いを込めた第一作だった。遠藤氏（前掲文）も、〈作家としての誕生のよろこびを、作に定着するのは必然のいとなみ〉であると言い、箕輪氏（前掲文）も、〈誕生という題名のもとに「運の強さ」という「理想美」を暗示した作品だからこそ〉創刊号に掲載したとする。この処女作に込めた谷崎の願いは、最早誰の目にも明らかである。比喩的に言えば、後一条帝の〈誕生〉を第二次「新思潮」誕生号に載せ、道長の強運に託して、作家谷崎潤一郎の〈誕生〉を図ったのが「誕生」であった。

最後に「信西」について述べたい。「脚本　象」（明43・10）に次ぐ三作目の戯曲「信西」（「スバル」明44・1）は谷崎が〈一番最初に書いた作品〉（「『刺青』『少年』など―創作余談（その二）」昭31・10）と言うものである。「平治物語」冒頭の信西譚の戯曲化で、プロットもほぼ原典通りである。吉田精一は〈運命をつかさどる星の光に、終始興味を集めて行く点も、日本の古典演劇に見られない新しさ〉（「谷崎潤一郎と西洋文学」昭29）と指摘するが、この不吉な星は原典に〈大伯経典におかせる時は、忠臣君に替奉るといふ天変也〉（岩波古典大系本本文に依る）とあり、信西の死という強迫観念がモチーフとなっている。この強迫観念は前述した如く当時の流行病でもあった。

主人公信西の独白というべきもので構成されており、その中に〈運命〉の語が多く見えているが、例えば

わしのやうに自分の運命があまりハツキリ見えすぎると、人は臆病にならずには居られぬものぢや。

見す〳〵判つて居ながら、どうかして其の運命に打ち克たう、打ち克たうとしたくなるのぢや。

と言い、〈わしは運命の前にお辞儀をするのが嫌なのぢや〉、あるいは、〈あの星の光が消えるまで、わしはさうして生きながらへ、運命の力に克つてみせるのぢや。〉と言うように、〈運命〉に翻弄されながらも、ただ嘆いているのではなく、それに抗して打ち克とうとする人間の苦を描きだすことで、信西という人間を描こうとした作品である。

谷崎は「新思潮」同人大貫晶川に「信西」の下書きを見せ批評を乞うた。信西の性格を誇大にしているとの大貫の評に、谷崎は書簡で〈史劇ハ必らずしも過去の実在の人物をそのまゝに描写することが必須の条件なりとハ存ぜず候まゝ御推察の通り自己のイデアールを現さんが為めに殊更に誇張したる次第〉[8]と応えている。すでに見た谷崎の史劇観が披露されている。谷崎はまた、信西を〈博覧宏識、頭脳明晰、感性鋭敏の傑人〉、〈死を恐怖する悟りきれぬ、個性のつよき人間〉として描いたとも言っているのに対して、佐々木氏（前掲文）はこれを受けて〈二律背反的人物造型の難しさ〉を指摘している。これは重要である。同書簡からは「信西」は当初二幕物として書かれたことがわかるし、前述した如く「誕生」より先に書かれたものであったとすれば、〈運命〉に対する信西の揺れ、つまり谷崎の〈運命〉への揺れが確認できる。しかし、その揺れは〈死を恐怖する悟りきれぬ〉弱い人間ではなく、死の強迫に抗する〈個性のつよき人間〉の方に止まった。結尾、信西を捕らえに来た光泰の科白、〈たはけた臆病者だな。命が惜しさに、穴の中に埋まつて居るとは〉に対するわざと嚙み合わぬ信西の科白、〈星はまだ光つて居るか。……〉は象徴である。これは信西のこの世への未練ではない。また、箕輪氏（前掲文）の言うように、〈わが「運命」の拙さを嘆く信西を描いたとしか考えようがない〉とは筆者は思わない。信西は最期の一瞬まで〈運命〉に打ち克つ望みを捨

てなかったのである。つまり、抗しきれない〈運命〉であることを承知しながら、死を賭して〈運命〉に打ち克とうとした人間を信西を通して谷崎は描いたのである。それが谷崎の言う〈個性〉であり〈誇張〉である。つまり、〈運命〉に能動的に対抗して打ち克とうという意志が〈自己のイデアール〉であった。郎党師光の〈力をこめて、運命の網を突き破っておしまいなされい〉と言うが如く。

谷崎は自己の芸術に、自分の生活を合わせていこうとする芸術至上主義者である。谷崎の創りだした主人公は〈運命〉と戦った。谷崎は文壇登龍を望んでいた。〈運命〉と戦う人物を描くことで、作家になることをわが〈運命〉としたのが、文壇登場前夜の谷崎であった。〈運命〉を負から正への転化させた谷崎は、道長の如く〈運命〉を味方に着けたのである。〈運命〉との戦いに勝利したのである。作家になれた谷崎に〈運命〉というテーマは不要となった。

〈運命〉の衣を脱ぎ捨て文壇に颯爽と立つ谷崎潤一郎は、明治四十四年十一月、〈もツと色彩の濃い、血だらけな歓楽〉（「秘密」）を纏い、文壇の檜舞台「中央公論」の初舞台を踏む。

注

（1）この辺の事情については「初期谷崎に於ける『颱風』の位置」（中村三代司・松村友視編『三田文学の系譜』昭63・12、三弥井書店刊）に於いて論じた。

（2）幼少期を材として取り入れていった作品で、〈運命〉の語が用いられているのは、本稿で取り上げた作品以外に「母を恋ふる記」（大8）、「不幸な母の話」（大10）、「少将滋幹の母」（昭24～25）、「当世鹿もどき」（昭36）等がある。

（3）谷崎は「青春物語」で「平家雑感」に言及している。そして、樗牛を〈下らない人間〉と徹底的に非難しているが、この評価の転換は後のことであり、当時の初期文章などを見ればその影響は明らかで、前引の如く〈樗牛にかぶれて〉いた学生であったことは事実である。

（4）中島氏（前掲文）に、この論説と書簡に〈真率〉〈真面目〉という〈共通語彙〉があるという指摘がある。

（5）明治三十九年三月、国木田独歩の『運命』が上梓されている。独歩については先に触れた。私見によれば、独歩との関係は従来あまり論じられないが、谷崎の描く〈運命〉の変化を考えるばあい、独歩の『運命』は看過できまい。ここには〈運命〉に対する負、正の両方が書かれている。〈人は到底運命の力より脱るゝことは出来ない〉という「運命論者」では〈運命の怪しき鬼〉に翻弄される弱い人間が書かれているのに対して、「馬上の友」「非凡なる凡人」は〈非運〉を乗越え、〈運命〉を開拓し立身出世した人間への讃歌になっている。「馬上の友」の糸井少年は家が〈零落〉し、〈尋常小学校まで〉しかやってもらえなかった。「非凡なる凡人」の桂少年は〈家運〉が傾き〈破産〉したため、中学校に行けず、〈銀行に出ること〉になるが、立身の決心をして上京、〈工手学校の夜学部〉で苦学し望みを叶えた。弟も同校に入れ、更生させる。桂は〈一家は非運の底にあれど〉、〈運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く〉人物として形象された。この少年たちの不幸の境遇は当時の谷崎兄弟のそれによく似ているし、その不幸はともに貧困という非運である。独歩の少年たちは自分の意志の力で貧困から脱出する。この構図は翌四十年の谷崎の習作三篇には見出せないが、前述した四十一年頃から見え始める〈変化〉に独歩の影響が考えられるのではないか。ここでは指摘するに留めたい。

（6）〔批評〕欄に「前号批評　一己の芸術観より栗原君の『史劇観を評す』を再評す―杉田直樹君」というタイトルで書かれている。

（7）これは明治三十年代の高山樗牛と坪内逍遙との史劇論争をふまえていると思われ、谷崎のこの立場は、樗牛の空想本位論より逍遙の史籍中心の主張に依っている。

（8）谷崎全集では年月不詳となっているが、文中に〈小山内〉の名も見えることから、明治43年6月以降のものと推定できる。

〈付記〉本稿は、慶應義塾大学国文学研究会大三五一回例会（昭56・6）で口頭発表した「明治期の谷崎潤一郎――『刺青』以前――」をもとにしているが、その後の発見も含め大幅に改変し、まったく新しいものになっている。なお、本稿の全集未収録作品「小僧の夢」は「文学」（平2・4）に、他の谷崎作品の引用は『愛読愛蔵版谷崎潤一郎全集』（中央公論社）に依り、ルビ、傍点等は適宜省略した。旧字体は新字体に直した。

（あかり・ちあき）